

2009 年度 在宅医療助成 完了報告書

市民講座

「進化する介護 in 千葉」

申請者 特定非営利活動法人リターンホーム
〒260-0841
千葉県千葉市中央区白旗 3-2-5
ラフォーレ蘇我 102 号

提出日 平成 21 年 12 月

概 要

1. 開催日時 2009年6月21日(日) 13:00~17:00
2. 開催場所 国立大学法人 千葉大学
〒263-8522
千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33
3. プログラム
人工呼吸器の講義
河原 仁志
独立行政法人国立病院機構八雲病院 小児科医長

目 的

欧米においては鼻口に装着する非侵襲的人工呼吸療法(NPPV)が主流であり筋ジストロフィーなど呼吸障害をもつ者も高いQOLを保ったまま長期にわたり自立的な地域生活を実現している。しかし、本邦における筋神経疾患患者に対する長期呼吸療法としては、気管切開を施し気管からカニューレを挿入するいわゆる侵襲的な方法による人工呼吸療法が主流であるため、必要のない気管切開が早期に行われ、声を失い、介護負担が増して在宅療養が不可能になるケースも少なくない。

医療従事者を対象としたNPPVの啓発研究集会は、厚生労働省の研究班などにより昨今ようやく見られるようになったが、専門的内容であり、障害当事者を対象としては行われていない。

また、在宅を支援している地域の診療所には波及していないため、人工呼吸器という気管切開をしている患者を想定しているケースも多いことから、在宅移行に協力が得られにくいケースも多い。

そこで、当NPOでは呼吸障害当事者や非医療専門職である介護者に対する啓蒙啓発の機会が喫緊に必要なであるとの認識において、本講座の開催を企画した。

市民講座の内容と報告

在宅で気管切開した人に吸引をどのようにするのが好ましいかについて河原医師から説明があった。吸引という行為がとても苦しいこと。カテーテルを奥まで入れて吸引するのではなく、空気を肺に入れた方が痰が出やすいということでした。痰をいかにカニューレに集められるのかが気管をきずつけないコツと言うことであった。それに有効なこととしてカフアシストの説明があった。しっかりと肺に空気を入れると言うことは痰を出しやすくすること、また進行性の病は

酸素が不足すると筋肉が削られるということであった。呼吸筋の低下を防ぐためにも、しっかりと空気を送り込むことが重要であるということであった。そこで有効なのが鼻マスク人口呼吸器であるということだった。

ヘルパーがする医療行為について、日本 ALS 協会理事川口有美子氏が痰の吸引をどのようにできるようにしてきたかについての経緯をお話いただいた。施設にほとんど入れず、在宅でしか暮らせない ALS 患者が家族の負担を考えながらどのようにして生きていけばよいのか。また、医療行為が必要であってもそれ一つ一つの行為はさほど難しくくないこと。それを家族以外が担わないと成り立たないことなどの話を聞いた。

ALS協会千葉県支部川上事務局長から千葉の ALS 患者の状況についての報告があった。川上事務局長の話では千葉では医療ケアに保守的であるということであった。ここを変えなくては ALS 患者は生きにくいという問題点について話した。

在宅で暮らす ALS 患者について立岩真也氏から、大学生が痰の吸引のある ALS 患者の支援に 入っている事例について紹介した。

会場は学生から 60 代後半までのヘルパーが約 50 名ほど集まった。医療的ケアは怖いというイメージが強かったそうであるが、会場に当事者が 5 人くらいいて、そこで繰り返し広げられる医療的ケアをみて身近に感じたそうである。

カフアシストはとても期待されている。



進化する介護 in 千葉

市民講座

日時 6月21日(日) 13:00~17:00

場所 中央介護福祉専門学校

プログラム

12:30 受付

13:00 開始
あいさつ 河原仁志

13:10 『伝の心など、呼吸器患者のITサポートについて』 仁科

14:10 『人工呼吸器をつけての地域生活のケアプラン、カフアシストの紹介』
川口有美子、橋本操

15:10 『京都での人工呼吸器装着者のALS患者の支援について』 立岩真也

15:10 休憩

15:20 『鼻マスク人工呼吸器、人工呼吸器装着者のフォーラム』 河原仁志

17:00 終了

主催 NPO法人リターンホーム

